

編集後記：2019年の日本は台風災害の年になってしまいました。中でも広範囲に大雨や浸水害をもたらした台風第19号は、上陸前に「狩野川台風級」と気象庁が警告するほどの威力でした。ここで言及された狩野川のある静岡県の伊豆半島は私の地元になります。流域には天城峠や修善寺温泉などの観光地があり、また歴史的には源頼朝の配流地として、全国的にもそれなりに知られていると私見では思っています。今回のことで、私が小学生のころ、学校の教師が自身の幼少時に洪水から逃げた経験を語っていたことを思い出しましたが、年代的に恐らく狩野川台風での話だったと思われれます。報道等によりますと、今回の発表を受けて狩野川台風の被災地域では普段よりも迅速な避難が行われたようで、特に被災経験者の方々は過去の記憶が教訓となっていたのだと思います。

とは言え、災害の経験を風化させず後世に伝えるこ

とはなかなか難しいことです。現地では、地域の活動として当時の写真や映像資料の発掘収集、次の世代へ伝えるための教材の制作などを行っているそうです。勿論「天気」を始めとする学会誌、論文誌も、学術的観点から災害状況を何十年、何百年後に伝える役目を負っています。「天気」のバックナンバーを見てみますと、狩野川台風の被害発生直後の5巻11号（1958年11月）には、当時配備されて間もない気象レーダーによる台風の観測結果が掲載されています。また、翌1959年10月の6巻10号では、上陸前の太平洋上でアメリカ空軍による航空機ドロップゾンデ観測について解説しています（航空機観測による海面気圧の当時での戦後最低値を記録したようです）。昨年の台風においても、読者の皆様には多くの話題や議論を「天気」誌上へ提供していただければと思います。

（石田春磨）